

17. 最近の温暖化情報について

記録的な暑さやこれまでと異なる大雨のパターンや台風の動きなどについて、地球温暖化のせいといわれることが多いのです。実際はどうかということ、それを数値化して可視化することができればより明確に理解できると思われま。そうなれば、我々も自然に起きる不規則な変動を的確に認識して、少なくともそれを促進するような行動を慎む方向に生活意識を変えていくことの一つになるものと思われま。

これまで、すべての異常気象が温暖化のせいであるという確信が明確でなかったと思われま。しかし、最近の科学は特定の気象現象にどれほど温暖化が関係しているかという、いわば関わり方がどのようにこれまでと異なるのかということ、を定量的に説明できるようなことが可能になってきました。例えば、2018年の西日本豪雨では、発生確率は地球温暖化の影響で約3.3倍になって、総降水量も約7%増加したということを示すことができたり、40℃を記録した猛暑などは、温暖化がなければ起こりえなかつたというようなこと。このような定量的な分析結果が迅速に発表できるという方法を、イベント・アトリビューション（EA）ということ、温暖化を身近に危機感として感じるものになることが期待されています。

そうすると、社会の関心が継続して、温暖化にかかわる温室効果ガスの削減や防災などの現実的な対策強化に結びつくことができるようになります。とくに、自然災害が起きることは確実でもどこに、いつどのように起きるのかという予測が難しいときに、このような基本的な要素について情報が明確に提示されることは、被害を最小限にすることも寄与でき、ある意味で天気予報に近づく感じすら受けます。

もちろん、渡部雅浩氏（東大大気海洋研究所）がいわれるように、「EAを本当に役に立つ科学にするため、起きてしまったことの分析から、次に起きるであろうことへの評価と対策へつなげていきたい」は願いたいところ。EAによる研究成果は、地球規模での異常気象の変化を評価する重要な科学的根拠であるとして、2021年公表の国連の気候変動に関する政府間パネル(IPCC)でも明確に位置付けており、今後の発展が期待されているところ。我々の立場として、起きやすくなっていることを実感することは大変重要なこと、可視化できるということ。そして、将来の問題ではなく現実の感覚であるということ、情報を共有することで、備え・対応ができるようになるものと思われま。これまでの生活環境が変化する中で、この気象科学の新たな分野が我々の暮らし方をも変えるという点で大きく貢献するものだと大いに期待したいもの。